

# 若い世代に「帰っておいで」と胸を張れる農業をめざして



★ 加計呂麻島

## 棚山 育代 (もみやまいくよ)

神奈川県横浜市出身。日本海洋技術専門学校卒業。スキューバダイビングインストラクターとして世界各地で水中ガイドの教育、資格認定にあたる。帰国後、ナチュラルフード販売会社に入社。小さい島での生活とフルーツ生産農家に魅力を感じ、瀬戸内町を永住の地と決めた。

老人クラブ交歓大会  
で長寿の秘訣について  
話す筆者。



## ◆都会人としての視点を役立てたい

学生時代の友人が奄美大島に居ることから、加計呂麻島かけろまじまにも遊びに行くようになり、なんども訪れるうちに、島の生活とパッションフルーツが大好きになりました。パッションフルーツ栽培の研修センターがあると聞き、農業研修のための移住の準備を始めた矢先に、友人を通して「地域おこし協力隊」の募集を知り応募しました。

「地域おこし」についての経験も特別な資格もあるわけではありませんが、たとえば、ただ透き通った海の水がどれだけ魅力的かを、それがあたりまえのこととして生活してきた島の皆さんに伝えたり、島のふだんの食べものがどんなに珍しくておいしくて、そして売れるのだということに気づいてもらうなど、そうした都会の人間ならではの意見が役に立つかなと思いました。

農家希望なので農家の方と知り合い、人脈を広げ、いろいろ習えたらいいなあという打算もありました。とにかく住みたい。とにかく加計呂麻島が好きと熱望しました。

## ◆草刈りを手伝う中で、住民の声に耳を傾けた

自分は専門家ではないのでえらくない、主役ではない、「地域おこし」をひとりですると思わない、打ち上げ花火的なその場だけのイベントはしない、住民がやりたいこ

との「協力隊」であって住民の協力を徹する、ということ  
をまず心に決めました。私がやれることには限りがあるけ  
れど、これからお世話になる方々と一緒になって島の今後  
のために微力ながらも活動させてもらいたいと思いました。

瀬戸内町役場からは、観光でも農業でも集落支援でも高  
齢者の話し相手でも自分でできることをしてくださいとの  
ことでした。「なんでもいい」となると、悩みました。答  
えが出ないのでまずは、「島を知ること」を目標に地域の  
清掃作業に参加しました。少子高齢化の過疎地は草刈りが  
大変でした。そのうちに、どのような方が住んでいてどの  
ような雰囲気なのか知ることのできた集落もありましたが、  
なかなかすぐには、溶け込めませんでした。

集落をまわる理由がほしいと考えていたとき、あるおば  
あちゃんから子どもの声がしないのでさびしいといわれま  
した。学校のない集落を中心に一度、防災無線を借り  
て一回二三分の子どもの歌や演奏を流し始めました。楽  
しみにしてくれる方、お菓子やおにぎりを持ってきてくれ  
る方、悪天候でさばると次週には心配してくださる方、多  
くの方々に出会い会話がもてました。そして、しだいに住  
民の皆さんの声を聞くことができるようになりました。そ  
れは、一三〇〇人あまりいる住民のごく一部かもしれませ  
んが、「何かしなくちゃ島が淋しくなるばかりだ」と考え  
ている方がいることも知りました。

### ◆六次産業化地元グループ「しりたむんきや」を発足

五年前にUターンして、地元でベンションを開業した  
五〇代の女性と知り合いました。学校を卒業してから都会  
で生活してきた彼女は、「何もない良さ」といった島の魅  
力も、島の短所も熟知していました。近所に廃校になりそ  
うな学校があることを知って「なんかしなくちゃね〜」と  
彼女と話しあう中から、島特有の作物を栽培しようとい  
うことになりました。気の合う仲間六、七人で荒れた土地を  
開墾し、島バナナ、島小豆、島ハーブなどを植えました。  
土地を貸してくれる方々もしだいに増え、ど素人の農業を  
楽しげに見守っている人も、どうせできないと思ってい  
る人も、私たちに興味を持ちはじめしてくれたことは、小  
さな一歩でした。

その後、島で昔  
から飲まれている  
「グアバ茶」をつ  
くり、イベントで  
販売するまでにな  
りました。地元の方  
ならではの熱い  
思いが詰まったブ  
レゼンが功を奏し、



菴美大島の南側に大島海峡をはさんで向かいあう形で位置する島。瀬戸内町の南部を占める。95%が林野で覆われている。



6次産業化グループの畑開墾風景。

県の助成金もおり、その助成金で加工場整備や生産・販売に必要な運転開始資金をまかない、地域活性化団体として「しりたむんきゃ」を発足しました。いまでは加計呂麻茶のシリーズを増やし、ネット販売開始の準備に向かっています。おばあちゃんに島のおやつをつくり方を教わり、イベントで販売したりもしました。携わる人数もしだいに増え、「しりたむんきゃ」は、確実に前進できるグループとなりました。まだまだ収益は月に数万円です。協力隊が終わったあとは、通信販売や海の駅での販売に協力していきたいと思っています。地元の本気の思いを持ったキーパーソンと一緒に進めたからこそ、島の多くの人を動かせたのだと思います。

### ◆「学ぶ島」をアピール

修学旅行生を呼び込もうと、さまざまな試みもしました。島の魅力を伝える「島体験プログラム」の勉強会、島料理勉強会、民泊受け入れ先進地への視察などしながら、移住体験ツアーや被災地からの小中学生、大学生ゼミの受け入



民泊協議会が実施した大学生の受け入れ。入島式でのオリエンテーション。

れをしてきました。島の人口や年齢層から、受け入れを引き受けてくださる家庭がそう多くはないので、修学旅行よりも、大学生ゼミのような小人数グループから少しずつ受け入れようと動いています。今年度は関東からの看護学部、関西からの高齢者施設、巡回医療車、診療所をまわり離島医療を学んでいけます。関西からは島の生活を調査するゼミの皆さんが訪れます。「学ぶ島」のアピールをして交流人口と島の方々の楽しみと島の収入を増やしていきたいと思っています。現在はできる範囲で連絡係を継続していきます。この活動も少しでも島を盛り上げようと手を挙げてくれた方々の力で継続できています。

### ◆地元の人が動いてこそ本物の協力になる

役場のある本島側と海を挟んでいる加計呂麻島は、行政との協力体制に課題を感じました。

いま振り返ると、活動の進め方や必要な資金の補助の受

鳥の人の本音にふれるとき、無理強いは鳥のためにならないことだと思いました。地域おこしは、地元の方々が動いたときこそが本物だと思います。ホームペー

ジをつくって宣伝したから？ 観光客が増えたから？ 遊休地をいっぱい開墾したから？ それ

け方など、もつと積極的に相談をすればよかったと思います。また、鳥の人への「地域おこし協力隊」を導入したことの周知など、もつとうまくできていたら、自分を知っていただいて人間関係を築くために一年を費やすこともなく有効に時間を使えたと思います。

住民すべてが地域おこしを望んでいるわけではないことを知ることも大事だと思います。「そつとしておいてほしい」「三年やそこらでかきまわさないでほしい」「雰囲気が変わってしまう」「移住者で人口が増えて、ちがう島になつてしまいうぐらいなら、このままでいい」……。そうした

### 受け入れ側からみた隊員の活動

#### ●鳥の現状

世帯数800、人口1,300人の加計呂麻島に「地域おこし協力隊」の2人がやってきたのは、東北の大震災の直後だった。

当初、4月から着任の予定であったが、震災復興のボランティア活動の最中であったため6月からとなった。復興のボランティア活動中だということで、その後の島での活動に期待を抱いたのを記憶している。町としてもはじめて導入した制度であり、手探りの中で活動を始めてもらったのだが、彼女たちが、過疎化・高齢化の進むこの島に何かしらの新しい動きをもたらしてくれた。

#### ●隊員の活躍

私を感じる島の人の気質として、昔からお互いが知り合いであるがゆえの許しあい、馴れ合い。言いたいことがあっても表現が苦手。そんなところがあるように思う。良し悪しあるとは思いますが、島で生まれ育った私は、島人(まっちゃん)のそんなところも好きである。

都会で生まれ育った隊員が、果たしてそんな感覚を受け入れて馴染んでいけるのか？ 都会での感覚をそのまま持ち込み、のんびり、ゆっくり過ぎてきた島の人たちとの間に心の摩擦が生じはしないか？ などと不安があったのもまた事実である。しかし、隊員はつねに島の人の心と目線に気を配り、先に述べた島の人の気質のようなものを逆なでするようなことはなかった。

薩川集落の住民とともに「しりたむんきや」を立ち上げ、補助金で加工場を整備してグアバやゲットウのお茶の加工販売を軌道に乗せ、また住民とともに加計呂麻民泊協議会を立ち上げ、事務局を担当し、住民と視察研修を計画実施するなど、常に住民の目線に立って活動してくれた。

#### ●これからへ向けて

本町の場合、加計呂麻島・与路島・請島・奄美本島と4地域があり、これまで隊員が活動の中心としていた地域のほかの地区からも「地域おこし協力隊」配置を望む声が聞かれる。これは隊員がこれまでの3年間の間にいかに地域に密着し尽力してきたかの表われだと思う。

隊員が、任期終了後、引き続き島に定住していることはこの事業の目的を達成したといえるが、今後、隊員が癒しの島」といわれるこの島で長く生活していけるよう、これからもことあるごとに声かけをし、互いに「地域おこし協力隊」でつながったものを活かしていきたい。

(鹿児島県瀬戸内町企画課 渡 博司)

地域おこしではなく、地元の人が望む形で地元の方がつくり上げてこそ意味があるのだと思います。自分の活動がそのきっかけとなるまでには、長い時間がかかりました。成果はいくつかの継続的な活動が残せたこと、そして最初のおばあちゃんに楽しい時間を少しあげられたかな？ と思います。

今後は、民泊、しりたむんきや、高齢者のためのゴルフなど継続的な活動の協力と、島の若い世代に向けて、楽しく暮らせるだけの収入は稼げるから帰っておいでと胸を張れる農業をすることが目標です。